

「知的障がい支援学校の新校整備を 求める請願署名」を大きくひろげよう

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

支援学校増設決起集会

9月6日(土)、「支援学校増設決起集会」が、たかつガーデンとオンラインの併用で開催されました。今回の集会は、大障教と大阪の障害児教育をすすめる会の共催で、保護者をはじめ、教職員、関係者が府内の各地域から33人参加しました。

集会では、知的障害支援学校の状況報告と署名活動の行動提起、地域からのとりくみ報告や各校の現状について発言があり、「署名運動を大きくひろげていこう」と参加者が確認しました。集会後は、近鉄上本町駅前でも署名宣伝をおこないました。

各地域に新校整備を！運動できりひろげよう

冒頭に、書記長から支援学校増設運動の到達と現状や課題について、歴史的な経過もふまえて報告がありました。各地域からは初めに、北河内の障害児教育を進展させる会から、北河内地域にもう一校新校整備が必要であることを市議会議員に訴え、枚方市議会での意見書採択へ結



各地域から「過大・過密」の実態や署名運動への思いが語られました

「支援学校新設をすすめる会」を結成し、「東大阪市に知的障がい支援学校の新設を求める署名」に2万筆以上を目標に、集会を開催し、今府議会への働きかけもすすめている、さらに署名を大きくひろげて東大阪市に学校新設の実現を大阪全体の署名運動とともにすすめたいと報告がありました。



街頭署名宣伝の予定

- 10月10日(金) 18時
JR天王寺駅公園口前
- 10月11日(土) 11時15分
近鉄八尾駅前
(教育のつどい大阪全体会の前に実施)
- 10月15日(水) 17時30分
JR柏原駅前
- 11月19日(水) 18時
阪急上新庄駅南口前

ぜひご参加ください！

全教職員が署名活動にとりくもう

大障教は大阪障害児教育運動連絡会の一員として、大障教の各分会をはじめ、よりよい教育を願う民主団体や労働組合などの協力・共同で運動を広げました。大障教に対して、いまそ支援学校の新校整備に踏み出すように迫ることが重要です。大障教組合員の皆さんはもとより、すべての教職員のみならず、ご家族やご友人など、幅広い署名への協力を心より呼びかけます。また、大障教として、地域や保護者とも共同して、



集会後は署名宣伝をおこない府民と対話しました

各ブロックで署名宣伝にとりくみます。

つづいて、今年度の署名運動への思いと各校の「過大・過密」や「通学区割」の問題について、佐野、和泉、四條畷校、八尾、摂津、守口支援分会から語られました。また、保護者からは、支援学校は、各生活圏・福祉圏域に沿ってつくってほしい、鶴見区にステキな支援学校をつくる会からも整備予定の新校について発言がありました。閉会の挨拶で大阪の障害

児教育をすすめる会の岩田副会長は、「子どもを真ん中に保護者・教職員・関係者がともに手を取り合って運動をすすめていこう」と呼びかけました。終了後の署名宣伝には、16名が参加し、68筆集まりました。

参加者からは、「分会や地域で署名にとりくみたい」「教員、保護者の生の声を聞くことができた」と感想が寄せられました。

書記局の つづい

一政党の総裁を決める内部問題を国民的ニュースのように扱うメディアの報道に辟易させられます。とはいえ、先の参議院選挙で衆参ともに与党が過半数割れた事態を受け、石破茂首相の退陣表明に伴う自民党総裁選が22日告示(10月4日投票)されました。

いずれの候補も参院選での大敗の要因の一つとなった「政治とカネ」の問題や国民の切実な要求である物価高対策などは示さない一方で、排外主義や改憲などを競い合い、一部野党や右派・保守層に支持、連携を広げようとする姿勢を際立たせています。

とりわけ、際立つのは外国人政策で、外国人への憎悪をあおる発言を展開し、外国人施策の強化を推し進めるなど、外国人を排除する考えを色濃くにしました。

戦後80年の今、日本の侵略戦争による加害について否定する極右・排外主義勢力が日本でも顕著に台頭し始めました。歴史的事実に基づかない言説がSNSなどで拡散され、違和感なく受け入れられる状況になっていることに恐ろしきを感じます。何よりも、マスメディアが、そうした言説などを無批判に垂れ流してしまっています。

この8月に出版されたばかり、小説家の平野啓一郎さんのエッセー集『あなたが政治について語る時』(岩波新書)には、ここ数年の政治社会問題のコラム・エッセーがまとめられています。冒頭のエッセーからの引用。

「政治について語る」とは、依然としてタブー視されがちである。(中略)日本の現状は、決して楽観できない。今、「政治について語る」ことを避けて、いつ語るのか。

大障教ホームページアドレス <http://fc06631220171211.web2.blks.jp/> Eメールアドレス:fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp

現状を語り合い、多くの気づきと勇気を得た！

北河内ブロック合同教研

8月1日～2日、北河内ブロック合同教研を四條畷市のアイ・アイ・ランドにて行いました。今年で12回目となり、各分会（交野支援、光陽支援、四條畷校、寝屋川支援、枚方支援、守口支援など）から23人が参加しました。

現行の制度の裏に、多くの教員の涙と粘り強い交渉が

1日目の学習会①は、大障教女性部の荒木佳子さんの「女性部での活動と教員として私を育ててくれた言葉」と題したお話でした。荒木さんは、若き日の経験から「自分の価値観で生徒を見てはいけ

ない。一人ひとりに大切な人生がある」との気づきを得たことを紹介。また、闘病中の教え子に寄り添う中で、医師から「あなたも治療チームの一員です」と言われたことや、修学旅行の引率で沖縄の語り部の方から「大丈夫。先生は君たちに『生きろ』と言ってくれ」と語られたことなど心に残る体験を語り、全教が掲げる「教え子を再び戦場に送るな」という誓いを強調

しました。教師の仕事が単なる授業にとどまらず、命と平和を守る営みであることを学び直す時間となりました。女性部の活動については、産前産後休暇や体育実技軽減など制度改善を勝ち取ってきた歴史を紹介しました。養護学校教員の流産率が1%に上るほど過酷な職場環境であったことも語られ、参加者から驚きの声が上がりました。現行の制度の裏には、多くの



女性部の歴史を伝える
荒木さん

参加者の感想

- 「微力は無力ではない」という言葉が心に残りました。私はいつも微力ですが、意味はあるのだとうれしかったです。
- 私が妊娠出産のときに取りることができた体育実技軽減や特別休暇など、当たり前だと思っていたらいけないなと思いました。
- 「過大・過密」によって具体的に何ができなくなったのか、悪影響があるのかなど声を大にして伝えていかねばならないと思いました。
- 他府県の様子が知れて考えを深めるきっかけとなりました。
- 各分会の様子、しんどいことも含めて言うのも聞くのも楽しかったです
- 継続して力を合わせることの大切さを学ぶことができました。

教員の涙と、粘り強い交渉があったことがわかり、深い感銘を受けました。参加者からは「女性が軽んじられる現実」に怒りと悲しみを覚える」「安心して子どもを産み働ける環境にしたい」との声や、制度があっても周囲の理解不足や複雑な手続きによって活用しづらい現状も指摘されました。そのため、「声を上げ続け、制度を育てることが大事だ」との意見が出されました。最後に荒木さんは「グチもみれば要求」「集まれば元氣、語り合えば勇気、仲間が増えれば力」という女性部のモットーを紹介。参加者は、権利は自ら勝ち取り守り続けるものだ」と改めて心に刻み込みました。

学習会②は、「続・私にとつての組合活動」をテーマに、各職場分会の取り組みや工夫、課題について意見を交流しました。分会ごとに課題は違っても共通するのは「つながり、助け合い、支え合い」で、人と人とのつながりが力に変わることを改めて感じました。工夫あふれる事例が紹介され「うちでも実践したい」という声が上がりました。



原水爆禁止世界大会IN広島

に参加して

動く分科会「佐世保基地調査行動」に参加し、呉では自衛隊の潜水艦などが停泊している港、貯油所や火薬庫、そして周囲の民家が非常に近隣にあるかを見られました。どんなに自分の目の前にあっても、「国のもの」「呉の住民のこと」というようなどこか遠いものに思える存在が、「国が弾薬をつくるための火薬を民間企業から買い取っている」という話を聞いたとたんに、目に映るものが一気に自分に近いものを感じました。大阪でも、勤務地によっては半径10km圏内に弾薬庫があります。他人事ではない現実が目の前にあるのを忘れてはいけません。広島に足を運んで「過ちは繰り返しませんから」の碑文に手を合わせる意味を、今一度、自分にも問うてみたいと思います。

出来島支援 樋口真弓

制度や環境は自然によくなるものではない



「過大・過密」問題について語る坂東さん

2日目の学習会③は、「北河内の学校建設の取り組み」とこれまでの運動の成果と現状、これからの展望をテーマに、四條畷校分会の坂東敏男さんから話を聞きました。支援学校建設の課題は、毎年現状や歴史を確認しようとする参加者の関心が高く、今回も多く学びがありました。

坂東さんは、これまでの学校建設の歴史や、府の施設整備基本方針、児童生徒数の推移、通学区域変更による実態、他府県の動向などの

緻密な資料をもとに、「過大・過密」問題について説明しました。意見交流では、「厳しい現状が続く中で、これが普通」という感覚に陥ってしまっている「『過大・過密』を感じている」という声も聞かれました。一方、「現状をしっかりと知ることが行動につながる」とともに運動をすすめる中で、涙ながらに新校建設を訴える保護者の姿を見た。何もしない訳にはいかないといつた発言もあり、今回学んだことを広めていく重要性を共有しました。

2日間の教研を通じて、女性部や学校建設に関する「闘いの歴史」から学び、各職場の

現状を語り合うことで、多くの気づきと勇気を得ることができました。制度や環境は自然によくなるものではなく、声を上げ続けたからこそ勝ち取ってきたのだと改めて実感しました。学習会の参加者の発言の中で、ベテランの先生から「先生たちはもともと怒っているのです。子どもたちのために熱い気持ちを持ち続けてください」との力強い激励を受けました。その言葉は、私たちに「現状への怒りを要求に変える」ことの大切さを気づかせてくれました。今回の学びを日々の実践と運動につなげ、前に進んでいきたいと思えます。

(寝屋川支援分会 佐野武尊)